

## 推薦の辞

超音波診断装置は1949年、日本無線が世に送り出した魚群探知機を応用し1950年にJ.J.Wildらが体内の組織を識別する超音波装置の開発に着手、頭部の腫瘍などを診断する装置を開発しました。同年にG.D. Ludwingらが胆石の検出を試みましたが、腸のガスの問題などから悲観的な見解を報告しています。そのようななかで1955年には超音波ドプラ法が発表され、米国超音波医学界が発足、1961年に本邦でも超音波医学研究会が発足し、以後めざましい進歩を遂げ現在にいたっています。小児領域では2014年に日本小児超音波検査研究会も発足しています。

超音波検査は被曝や侵襲がなく繰り返しおこなえるメリットがあり、特に小児領域では必要不可欠な検査となりました。しかし、その原理や方法がわからないまま検査をおこなうとそこに何が描出されているのかわからず、画像が鮮明でない場合には誤った診断につながります。また、リアルタイムに画像を見ないと描出された画像だけでは検査をおこなう人の力量により説得力に欠ける画像が示されるなどデメリットもあります。

この小児超音波検査法の腹部編では基礎と各論に別けて解説し、画像が構成される原理が理解できます。その後、各論でプローブをあてるべき方向や角度から得られる画像をステップごとに描写し、今何を見ているかが詳細に図示してあります。初めて超音波機器に触れる医師、技師の方にも容易に画像が理解出来るよう解説してあり、自然に超音波検査の魅力に引き込まれる書物に仕上がりました。成人にない小児特有の疾患を多くの画像で示し、小児科や小児外科疾患診断のポイントが最後に「Point」として記述してあるところは特筆すべき点です。肝臓、胆嚢、膵臓疾患から小児泌尿器疾患、消化管疾患まで幅広く小児疾患をカバーしてあります。また、外傷におけるFASTまでその描出方法が示しており、小児の超音波が聴診器と同じように誰でもどこでも施行できる入門書としてビギナーから経験者まで幅広くご活用いただければと思います。

2018年5月吉日

北川 博昭

聖マリアンナ医科大学 病院長 小児外科教授